

新潟工場生産性2倍

ATM組み立てスキル可視化

富士通フロンテック

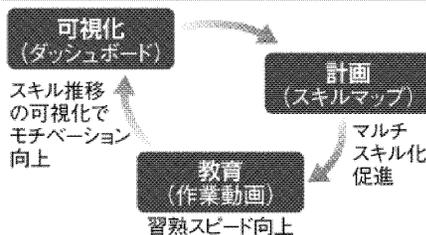
富士通フロンテック（東京都稲城市、渡部広史社長）は、現金自動預払機（ATM）の組み立てなどを手がける新潟工場（新潟県燕市）の生産性を2023年度に従来比2倍に引き上げる。工場作業員の技能を可視化し、スキル管理をデジタル化。生産計画を基に不

足する技能を割り出し、人材教育計画を作成する。教育のデジタル変革（DX）により、部品不足や特需などでも生産計画に変動があっても作業効率を落とさない体制を目指す。23年度中に生産計画を作業工程に必要な技能と連動させる。すでに各作業員のスキル

は、作業項目単位で可視化されている段階で、今後は生産計画との連動を進める。作業員のスキルの可視化によって、工程を組む際に足りないスキルを把握できる。不足部分に対して教育計画を立案する。これまでは作業長が感覚などに

単位で管理していた。将来は不足スキルに対して、人工知能（AI）を用いた人員配置を検討する。作業教育や習熟の効率化も強化。作業者は事前にマニュアル動画を自分のペースに合わせてセルフトレーニングすることで、生産ラインでのオン・ザ

デジタルスキル管理システムによる教育の体系化



富士通フロンテックの資料を基に作成

新潟工場ではATM以外に、手のひら静脈認証や無線識別（RFID）タグなどを製造する。多品種少量生産への効果的な対応を検討してきた。静脈認証

・ジョブ・トレーニング（OJT）の期間を短縮する。ATMなどに関する22年度の作業教育にかかる工数は、21年度比で約60%減となる見込みだ。

やRFIDタグは生産の自動化が進むが、主要生産品目のATMの組み立てでは人手に頼らざるを得ない。人材育成のDX推進で生産効率を高める。